

[書評] Thomas M. McKenna, Muslim Rulers and Rebels: Everyday Politics and Armed Separatism in the Southern Philippines

著者	川中 豪
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	40
号	9/10
ページ	213-216
発行年	1999-10
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/646

Thomas M. McKenna,

*Muslim Rulers and Rebels :
Everyday Politics and Armed
Separatism in the Southern
Philippines.*

Berkeley : University of California Press,
1998, xv + 364 pp.

かわ なか たけし
川 中 豪

I

農民反乱という集団行動の形態から目を移して、日常生活における支配者に対する農民の抵抗に着目したジェームズ・スコット (James C. Scott) の「日常型の抵抗」の枠組みは、東南アジア政治研究に新たな地平を開いたものとして高く評価されている^(注1)。「日常型の抵抗」は、密猟、不法居住、サボタージュなどの形態をとるという現象的な面での特徴の他に、もう一方では、支配者のイデオロギー支配に対抗する農民のサブカルチャーの存在を指摘する議論としても注目される。この点において、従属的な立場にある者は意識の面においても支配者のイデオロギーによって支配されているとする、アントニオ・グラムシ (Antonio Gramsci) の「ヘゲモニー論」^(注2)に対して異議をとなえるものである。

フィリピン研究においては、この「日常型の抵抗」の枠組みを適用する試みは、ベネディクト・カークフリート (Benedict J. Tria Kerkvliet) によってすでに行われているが^(注3)、本書は、この「日常型の抵抗」の枠組み——筆者はカークフリエートの影響を受けて「日常の政治」としているが、——を援用し、南部フィリピンのムスリムの政治を解明することを目的としている。

カトリック教徒が人口の多数を占めるフィリピン

ではあるが、ミンダナオ島を中心とした南部地域には多くのムスリムが居住している。フェルディナンド・マルコス (Ferdinand Marcos) 大統領政権下の1960年代末から、この地域においては、ムスリムの分離独立運動が続いており、特にムスリム反政府組織であるモロ民族解放戦線 (MNLF) とマルコス政権が1976年に休戦協定であるトリポリ協定を結ぶまでは、激しい戦闘が繰り返されてきた。本書は、武装反乱、そして、その後の合法闘争を含めた分離独立運動の過程——それ自身は「日常型の抵抗」とは異なる集団行動であるが——を通じて、ムスリム・エリート層のイデオロギーと、それに対する一般のムスリム住民 (反乱軍の平の兵卒を含む) の認識を考察することを中心課題としている。

本書で提示される仮説は、エリート層のイデオロギーから自由なムスリム住民の認識が存在したというものであり、その議論を説明する枠組みとして「日常の政治」が使われている。なお、エリート層といっても、本書では、(1)「ダトゥ」(datu) と呼ばれるムスリムの伝統的支配者層、(2)伝統的支配者に対抗する新しい指導者、つまり、モロ民族解放戦線やそこから分裂したモロ・イスラム解放戦線 (MILF) の指導部、の2つの異なるエリートが登場する。そして、この2つのエリートはそれぞれ別のイデオロギーを有しているとされる。この2つのイデオロギーが相対立しながら一般のムスリム住民に対するヘゲモニーの確立を争ったが、結局、どちらも一般のムスリム住民をヘゲモニーのもとに置けなかったというのが本書の主張である。

II

本書の構成は以下のとおりである。

序論 ムスリム・フィリピンにおける非日常・日常の政治

第1章 遺産の政治

第2章 コタバトの人々と領域

第3章 コタバトのイスラーム支配

第4章 ヨーロッパによる押し付けとモロ意識の神話

- 第5章 アメリカのモロ
- 第6章 独立以降の移行
- 第7章 ムスリム分離運動とモロ民族の反乱
- 第8章 カンボ・ムスリムの戦争について
- 第9章 非武装の闘争
- 第10章 マルコス以降のムスリム・ナショナリズム
- 第11章 コタバトの抵抗と支配

目次をただただ見ただけではその内容がつかみにくいが、大まかに言えば以下のように要約されよう。

まず、序論において研究の目的、つまり、分離独立運動に対する一般のムスリム住民の認識を把握することが示され、具体的な調査地として、コタバト市に位置するムスリム住民によって形成された都市貧困層地域、カンボ・ムスリム (Campo Muslim) を選んだことが説明される。続いて、第1章で研究の枠組みの議論が行われる。ここでは、分析枠組みとして「ヘゲモニー論」と「日常型の抵抗」の対立を紹介し、こうした対立を念頭におき、前述の3者、つまり、伝統的支配者であるダトゥ、新しいエリートである反乱指導者、そして、一般のムスリム住民の間の価値意識の関係を、分離独立運動の過程で描きだすという意図が表明される。ここで一般のムスリム住民が、ダトゥや反乱指導者のイデオロギーとは異なる意識をもって、分離独立運動を認識しているという仮説が提示される。

第2章で調査地であるコタバトの社会経済的背景が説明された後、第3章から本論が始まっているが、支配者のイデオロギーについての問題提起がなされるのがこの章である。伝統的支配者であるダトゥと新しいエリートである反乱指導者は、前者が、支配のイデオロギーとして血筋に依拠する「伝統的な身分の高貴さ」を、後者が、いくつもの民族言語集団に分かれるムスリムを包括するイデオロギーである「モロ・ナショナリズム」を作りあげ、それぞれ自らの地位や行動の正当化に利用していると指摘する。この章はそのまま、前者の伝統的支配のイデオロギーを取り扱い、実際のダトゥ支配は、パトロン・クライアント的な2者間の交換関係ではなく、暴力と

略奪の関係でしかないとする。

第4章、第5章は、新しいエリートの依拠するモロ・ナショナリズムの解明である。300年にわたるスペインへの抵抗の歴史の中でモロ・ナショナリズムが形成されてきたという議論を否定し、スペインとの関係においてはモロ・ナショナリズムは存在しておらず、むしろ逆説的に、この意識はアメリカ植民地統治下に、アメリカが作りだしたものだとの議論を展開している。アメリカは、諸民族言語集団に分かれていた南部フィリピンのムスリムを、まず、ひとつの集団意識のもとに結合させ、それによって、さらに上位のフィリピンという国民国家に統合させるのを容易にしようとはかったというのである。具体的には、ダトゥの子弟に対するアメリカ人の教育が取り上げられている。

2種のエリートの依拠するイデオロギーの説明が終わった後で、第6章において、筆者は、フィリピン独立後のコタバトを取り巻く政治社会環境を描いている。これは同時に1960年代末から発生する分離独立運動に至る過程の説明であるともいえる。この時期の特徴は、キリスト教徒の大量の流入、コタバト・ムスリムの都市への移動、伝統的ダトゥの政治支配の強化の3つに整理されている。

こうした政治社会状況の中で分離独立運動が発生してくるわけだが、続く第7章では分離独立運動を担った2つのタイプの新しいリーダーの登場が描かれている。ひとつはマニラで教育を受けたグループ、もうひとつはエジプトなど海外でイスラーム教育を受けたグループである。キリスト教徒の流入による土地問題の発生とその暴力化、また、一方で「ジャビダ虐殺」事件^(注4)に代表されるマルコス政権の反ムスリムの姿勢がこの2つの新しいエリートのグループを共同 (collaborate) させ、分離独立運動に至らせる過程が描かれている。

ここまできて、ようやく第8章において、序論で強調された一般のムスリム住民、つまり、コタバト市のカンボ・ムスリムの住民についての描写が登場する。ここでは、まず、カンボ・ムスリムの形成が2人の住民のケースを軸に描かれ、さらに、ムスリム武力反乱が発生した時期のカンボ・ムスリムの状

況、特に政府軍の暴力とムスリム反乱軍の活動について述べられている。そして、一般のムスリム住民の意識を探る手がかりとして、その地で作られ歌われた歌のフレーズが取り上げられ、その分析を通じて、一般のムスリム住民は「モロ」であるとか、「イスラーム」であるといった価値のために反乱を支持するのではなく、貧困状況からの社会的地位向上の道筋として、あるいは、自らの居住する狭いコミュニティの保護のために、反乱に参加しているとの主張がされる。

第9章では、カンボ・ムスリムにおける、伝統的エリートと新しいエリートのイデオロギー支配の優位性をめぐる争いが取り上げられ、それに対する一般のムスリム住民の反応に言及されている。ここで中心的な役割を与えられているのは、新しいエリートと一体化したイスラーム聖職者である。国際的なイスラームの中心との結びつきを持った彼らは、ダトウ支配を支える「伝統的な身分の高貴さ」に基づく不平等を攻撃し、一方で日常生活における厳格なイスラームの教えの励行を推進した。一般のムスリム住民は、こうした動きに対し、不平等批判に関しては支持しながらも、厳格なイスラームの教えに対しては実行することの実際上の困難さから、「日常の政治」的に拒否しているとされる。

第10章は、1986年のマルコス政権崩壊以降を取り扱っているが、そこでは、特に選挙を通じての新旧エリート入り乱れた政治権力獲得のための争いが描かれているのみである。そして、第11章で結論となるわけであるが、ここでは「ヘゲモニー論」と「日常の政治」の論争が再び繰返され、一般のムスリム住民は、伝統的支配者のイデオロギー、新しいエリートのイデオロギー双方から自由であるとする主張が繰返されている。

III

「日常型の抵抗」の視点を、日常における支配者と従属者の関係のみならず、日常的ではない反乱の場面における指導者と一般住民の关系到まで適用しようとする視点は、確かにおもしろい。これまでの

南部フィリピンのムスリム反政府運動に関する記述、研究のほとんどは、運動指導者のイデオロギー、あるいは指導部の対立を含めた事件の時系列的列挙であり、一般のムスリム住民のレベルにおける調査、研究は、管見の限りあまりなかったといつてよい。反乱リーダーのイデオロギー以外に一般のムスリム住民の認識に注目した本書の視点は、「日常型の抵抗」の研究の深化としてのみならず、反乱研究の新たな展開として意義深い。

しかしながら、実際の本書の記述に目を向けてみると、読み進めれば気づくように、この肝心の一般ムスリム住民に関する言及が非常に少ない。第8章と第9章の一部がこれにあたるのみで、分量からいっても本文289ページのうち63ページ以下に過ぎない。しかも、その内容も、例えば、一般のムスリム住民の意識を描くにあたって、わずかに3つの歌のフレーズが、その背景の説明なく取り出され、恣意的ではないかと疑われるような解釈がされたり、具体的な事例が提示されないまま、一般のムスリム住民が伝統的支配者や新しいリーダーたちのイデオロギーから自由だと主張されたりするだけである。筆者は14カ月の滞在でフィールド・ワークを行ったとしているが、これが生かされているとは思えない。

それでは、実際のカンボ・ムスリムの住民たちに関する記述が少なくすれば、本書は何を描いているのか。結局、これまでのムスリム分離独立運動に関するものと同様、指導者のイデオロギーと、事件の時系列的な記述であると言わざるをえない。伝統的支配者であるダトウの依存するイデオロギーおよびその支配体系、さらに分離独立運動の展開を通じて、新しいエリートのイデオロギーとその指導体制などが整理されているのである。

一方、理論的な面についても、「ヘゲモニー」論と「日常型の抵抗」の議論に関して、結局、結論の部分に至ってさえ、これらの議論を整理して紹介しているだけで、筆者なりの知見が加えられているとは思われない。突き詰めれば、これも実証的な基礎が不足していることから生み出されるものである。

革命運動や反乱運動の研究は、その情報へのアクセスが困難であるため、難しい研究領域であること

は確かである。また、スコットやカークフリースの研究のように支配者と従属的な立場にある者の二項対立的構図ではなく、国家、ダトゥ、反乱リーダー、一般ムスリムという4つの主体の登場する構図、しかも、反乱という状況の中で議論を進めることは、その関係の複雑さゆえの難しさがある。もちろん、反乱指導者のイデオロギーや指導体制の整理自体が、研究の基礎として重要であることも否定されるものではない。しかし、本書に関しては、枠組みの議論を読む限りにおいて、一步突っ込んだ研究がなされているのでは、との期待をもたせるだけに、また、視点自体がユニークであるために、実際の記述が以上のようなものに終始したことは残念である。結局、本書は、南部フィリピンのムスリムの政治を概説する本としての役割以上のものは果たしていない。

フィリピンにおいて反乱運動を一般住民に着目して研究したものとしては、ロザンヌ・ルッテンの論文がある^(注5)。ここではフィリピン共産党・新人民軍の運動へのリクルート活動とそれに対するネグロスの農園労働者の対応を取り扱い、実際のフィールド・ワークから、農園労働者の革命運動・反乱運動に関する認識、そして彼らがどう運動に巻き込まれ、また離脱していくかを詳細に描きだした。評者はフィリピンのムスリム反乱研究に関する専門家ではないため、見落としているだけかもしれないが、ルッテン論文に対応するようなムスリム反乱研究の出現が待ち望まれる。

(注1) James C. Scott, *Weapons of the Weak: The Everyday Forms of Peasant Resistance* (New Haven: Yale University Press, 1985). なお、日本語では、ジェームズ・C・スコット(藤原帰一訳)「日常型の抵抗」(坂本義和編『世界政治の構造変動 3 発展』岩波書店 1994年)参照。

(注2) Antonio Gramsci, *Selections from the Prison Notebooks*, ed. and trans., Quinten Hoare and Geoffrey Nowell Smith (London: Lawrence & Wishart, 1971).

(注3) Benedict J. Tria Kerkvliet, *Everyday Politics in the Philippines: Class and Status Relations in a Central Luzon Village* (Quezon City: New Day Publishers, 1991).

(注4) 1968年に発生した事件。フィリピン国軍によってリクルートされた180人のムスリムが、極秘にコレヒドール島において軍事訓練を受けていたが、そのうち14人がフィリピン軍によって射殺され、17人が行方不明となったもの。軍事訓練の目的については諸説あり不明であるが、虐殺に関連したフィリピン軍将校、兵士すべてが軍法会議において無罪判決を受けたことで、ムスリムの政府に対する不信が高まった。T. J. S. George, *Revolt in Mindanao: The Rise of Islam in Philippine Politics* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1980), pp. 122-128.

(注5) Rosanne Rutten, "Popular Support for the Revolutionary Movement CPP-NPA: Experiences in a Hacienda in Negros Occidental, 1978-1995," in *The Revolution Falters: The Left in Philippine Politics after 1986*, ed., Patricio A. Abinales (Ithaca: Southeast Asia Program Publications, Cornell University, 1996).

(アジア経済研究所地域研究第1部)